トピック　琵琶湖疏水

1. 多目的に利用される水路

琵琶湖疏水は、琵琶湖の水を物資の運搬や農業用水、水力発電など、多目的に利用するため、大津・三保ケ崎から京都・蹴上の間に建設された水路です。

計画を実現させたのは京都府知事の北垣国道で、大学を卒業したばかりの田邊朔郎を工事責任者にあてました。第一疏水の工事は1885（明治18）年に着工し、1890（明治23）年に完成しました。

発電については、当初は水車を動力として利用する予定でしたが、田辺のアメリカ視察によって発電に計画変更し、1891（明治24）年に日本初の水力発電所として蹴上発電所が運転を開始しました。

その後、電力や水道などの需要から、1912（明治45）年には、全線が地下トンネルの第二疏水が完成しました。

2. 桜と疏水通船

疏水の琵琶湖の取水口から続く桜は、疏水の開削時に植え始められたもので、開花時には三井寺（園城寺）山内の桜とあいまって、観桜の名所として知られています。

写真T-2　昭和初期の第一隧道の様子（絵葉書から）

また、1996（平成8）年に国史跡に指定され、2020（令和2）年に日本遺産に認定された琵琶湖疏水には、明治中期の日本の土木技術が感じられるポイントが、あちこちに残されています。

琵琶湖疏水の機能のうち、人や荷物を運ぶ舟運の役割は、交通の変化によって1951（昭和26）年に一旦途絶えますが、現在は観光航路として疏水の通船が復活し、再び疏水に船が行きかうようになりました。

写真T-1　明治期の疏水（手彩色写真）（大津市歴史博物館蔵）

大津市歴史博物館　**木津 勝**